幼児とメディア
『鬼滅の刃』視聴をめぐる学生の議論の考察

Infants and the Media
A Consideration　of Student Discussion on Viewing “Demon Slayer”

稲　田　公　子
Kimiko Inada

「福岡女学院大学紀要　人間関係学部」第 24 号抜刷
2023 年 3 月

幼児とメディア
『鬼滅の刃』視聴をめぐる学生の議論の考察

Infants and the Media
A Consideration of Student Discussion on Viewing “Demon Slayer”

稲　田　公　子
Kimiko Inada

はじめに

教育技術論児童文化財研究Ⅰの授業の中で児童文化財としての「メディア」について検討を行っていたとき「昔は鬼滅みたいなのがなかったよね」という声と同意する声が聴かれた。「鬼滅みたいなの」の意味を問うと「親が幼児に付き合うのではなくいっしょに映画を楽しむ」「女児も男児もない」「幼児も好きだし、大人のほうがもっと好きかもしれない」という。これは学生が見て育ったメディアと『鬼滅の刃』が本質的にどこか違っており、その流行に今までにない新しさを感じていることを示唆しているのではないかと思われた。一方で「怖いから見ていない」という学生も複数いた。鬼滅の刃について、実は筆者も後に示す理由で「幼児に見せてもよいのだろうか」という問を抱えていたところである。

そこで「手元にあった 7.5 × 2.5cm の付箋を配布して鬼滅の刃の視聴に関して自分が①親②保育者の立場であったなら幼児に見せるか見せないかを〇か×で記入し、見ていない人はその理由を簡単に記入するよう促した。

付箋には〇×で記入するよう指示していたが半数以上がコメントを記入していた。学生が〇×だけで答えることができない問題であると感じていることが推測される。そこで寄せられたコメントを集計して資料として示し、学生に討論させてみようと考えた。

本研究では児童文化財研究Ⅰの中で行った「鬼滅の刃を幼児に見せるか見せないか」の聞き取りから約２か月後、第 12 回の授業で行った学生のディベート形式の議論の考察・検討を試みる。

鬼滅の刃について

アニメ『鬼滅の刃』は 2019 年 4 月からテレビで放映された吾峠 呼世晴（ごとうげ こよはる、1989 年生まれ）による作品で「週刊少年ジャンプ」（集英社）に 2016 年 2 月から 2020 年 5 月まで連載された漫画を原作としている。2019 年 4 月からテレビアニメ第 1 期「『鬼滅の刃』竈門炭治郎 立志編」2021 年 12 月より第 2 期「『鬼滅の刃』遊郭編」が放映、また 2020 年 10 月には「劇場版『鬼滅の刃』無限列車編」が公開され、テーマ曲の爆発的なヒットにもあいまって一大ブームを巻き起こしていった。ただし放映時間帯が深夜であったこと（一部地域ではゴールデン）や映画のレイティングについて日本では PG12（Parental Guidance）指定となっており 12 歳以下の子供が見る場合には親の指導・助言が必要とされていることで、対象が低年齢ではないことがわかる。（北米はじめ諸外国の一部では暴力と流血描写によって R 指定で 18 歳未満は見ることができない）

しかしこれらのブームは幼児をも巻き込んでいく。ハロウィンで鬼滅の刃のキャラクターに扮した子どもの姿が報道番組などで多く取り上げられていたことからも垣間見える。Amazon や楽天などの通販サイトに掲載されている扮装のための衣装の多くは 100 センチ（3 歳）・110 センチ（4 ～ 5 歳）を下限として販売されており、販売対象が幼児を含んでいることが見て取れる。文房具、菓子等、キャラクターグッズの種類も

多く、大手コンビニエンスストアや有名衣料メーカーがコラボレートしており、食品を例にとってみればその種類は200を超える。これらの現象から、幼児を含め年齢を問わずこの作品が見る者の心を捉えていることがわかる。

問題と目的

筆者がこの作品に関心をよせたきっかけは商業施設での体験だった。大型モニターの前で就学前と見られる６歳と４歳くらいの兄妹を見かけた。両親はそばにおらず放映中のモニターの前に立って小学生・中高生も何人かいる中、皆食い入るように画面を見ている。興味を覚え近づくとアニメ『鬼滅の刃』が放映されており鮮烈な彩と音で殺戮が繰り広げられていた。体を斬られ血しぶきが舞った場面で女児が「きれい」とつぶやき、兄と思われる男児がうなずきつつ「血は赤いからな」と答えたのを耳にしたとき、言いようのない戦慄を覚えたのである。幼児は流血シーンをきれいだと捉えるのだろうか。しかしよく考えてみるとストーリーや音響の意味をしっかりと捉えていなければあり得ることなのではないか。意味を捉えておらず、抽象的に捉えれば彩豊かな美しいワンシーンであるのかもしれない。

そう考えるとこの作品を幼児に視聴させるには相当深い配慮が必要となるのではないだろうか。

『鬼滅の刃』は社会的な大ブームとなった作品であり、ストーリーの奥深さや学ぶべき心性が多いことについて異論はない。まして多様性が尊重される時代であり見るか見ないか、見せるか見せないかについての判断は個人に委ねられるべきことである。

このような作品が社会的なブームを引き起こしたことはかつて例を見ない。ジブリやディズニー等の作品群等にも幼児には理解が難しい内容もあるが作風も表現も異なるからである。そして今後も『鬼滅の刃』と同様の作品が出現することは想定される。

そこで幼児とメディアの新しいジャンルの出現ともいえる『鬼滅の刃』の視聴について学生が議論をつくした記録を基に先行研究を手掛かりに考察・検討を試みる。

方　法

１．先行研究に学ぶ

２．ディベートの考察と検討

⑴　対象

教育技術論児童文化財研究Ⅰを履修している学生３クラス73名（主に２年生）

⑵　時期

2022年度前期

⑶　ディベート形式の討論について

付箋で聞き取った○×形式の結果とコメントを提示したうえで１グループ４～６名で討議を行う。
議論をより深めるために、自分の意見とは関係なく単純に座席が窓側か壁側かでチームを分け賛成と反対の側に分かれて行うディベート形式で討議する。

⑷　ディベートの記録

討論では自分や味方の意見、相手の意見を様式無指定で記録する。議論をしながら記録をとることは簡単ではないが議事録のような正確な記録が必用ではないことを伝え、討議のあらましを記すことを求めた。

⑸　記録の分析

提出された記録を書き起こし「見せる」「見せない」に分けてKHコーダで共起ネットワークを作成する。

⑹　考察と検討

ディベートの記録と共起ネットワークを読み解き考察、検討する。

結　果

１．先行研究に学ぶ

五十嵐(2021)はメディアの利用者の低年齢化・不適切な使用に関しての懸念からメディアの弊害として心身への影響、発達への影響について示している。

「鬼滅の刃」の殺戮シーン視聴の影響が幼児の心身の発達に及ぶのではないかと考えてみたとき、高橋(1991)がBandula et al.(1988)が子どもたちは暴力的な場面を見ることによってそうした行動を学習し、類似の状況に置かれたときにその行動を行うようになるのだと主張したことを紹介している。その生態学的な意味での妥当性については疑問を呈しているが、Singer

and Singer（1981）が幼稚園児を対象として行った研究やEron et al.(1972)の９歳時点とその１０年後の暴力的な番組の視聴と攻撃的な行動の関連性についての分析で相関がみられていることからテレビの暴力番組の視聴がその後の子どもの攻撃性に影響していることは確かであるとしている。

同様にミシガン大学で1977年から1992年までかけて行われた縦断的研究（L. Rowell Huesmann, Jessica Moise-Titus, Cheryl-Lynn Podolski, and Leonard D. Eron2003）では329名の6歳から10歳の子どもにおけるテレビ暴力視聴と約15年後の成人の攻撃行動との縦断的関係を追跡し検討している。子どものテレビ暴力視聴、子どもの攻撃的な同性テレビキャラクターへの共感、テレビ暴力は現実的であるという子どもの認識が、成人の攻撃性と優位に相関することが明らかにされた。また幼少期の攻撃性について、本人の知的能力だけでなく両親の学歴や父親の職業による社会的地位、両親の攻撃性・移動志向、両親の視聴習慣（暴力視聴を含む）によるテレビ暴力への習慣的な早期暴露等から子どものその後の人生でより攻撃的になることが予測されることがわかった。さまざまな要因が変数として関わっているとしている。米国ではこのような暴力番組の影響についての縦断的な研究が深く進められていることで日本ではPG12の作品をもR指定とされることとなったのではないか。

前述の高橋は年長児・小学生・大学生を対象に同じアニメ「トムとジェリー」を見せて物語理解の実験を行っている。結果は年長児については示されていないが年齢の近い1年生のキャラクターへの評価は物語全体から引き出されたものではなく、一部分だけ、あるいは物語の展開とは関係のない身体的な特徴に基づいてなされたものであると考えられている。幼児の間で鬼滅の刃の人気が高まったのはストーリーとは関係のないところのキャラクターの魅力であったのかもしれない。

またテレビキャラクターの実在性について（足立絵美2012）の興味深い研究がある。幼稚園年長児30名と小学校1～3年生各20名を対象にテレビキャラクター（ドラえもんorのび太orウルトラマンコスモスorムサシ隊員）はテレビの外に本当にいるの？」とキャラクターの実在について個別に尋ねるというものである。特にアニメーションであること、ヒトのキャラクターであることが鬼滅の刃と共通するドラえもんの「のび太」に関しての問いには興味を惹かれる。「のび太」がテレビの外にいると答えたのは幼稚園で50%、1－2年生20%、3年生で25%に上る。幼児にとって映像の中のキャラクターと現実の境界は定かではないと考えられる。だとしたら幼児が『鬼滅の刃』のキャラクターがテレビの外にも存在すると感じてしまう可能性もあるのではないか。

一方で作品『鬼滅の刃』についての研究をみていくと井島はストーリーやキャラクターにレジリエンスの概念に一致するものが多いとし、心理学的なアプローチの可能性を探っている。また永田はその歴史的ヒットについて家族や暮らしがテーマとなった作品として理解可能であり親子で楽しむことのできる作品であるとする。そしてコロナ禍でコミュニケーションのハブとして機能して家族関係を円滑にし、生きる楽しみをもたらしてくれたからだと推測する。そう考えてみれば株式会社モニタスが2021年5月に行ったアンケートのデータが重要性を帯びてくる。全国の5,227,627を対象に行った「アニメに関する調査」の年代別アニメランキングでは『鬼滅の刃』がすべての年代で上位にランキングしている。アンケート回答者で最も多いのが30代女性で66,863名から回答があったとする。『鬼滅の刃』について男性では60代以外は2位か3位なのに対して女性では10代から50代まで1位となっている。30代の女性では14%が鬼滅の刃を面白いと答えており、20代40代含めてそれらは幼児を育てている世代にあてはまる。コロナ禍という時代背景を受けて永田の考える通り、鬼滅の刃は家族で、母子で視聴されていることは想像に難くない。

２．ディベートの記録と考察

⑴　ディベート形式の討論

討論は3クラス15グループで行った。

自分の意見と異なる側になり落胆する姿も見られたが、討議を続けるうちに自分の考えと同様であろう相手の意見に耳を傾けつつ真剣に反論する様子も見られた。

自分たちでディベートとしての勝敗を決めるよう促したが、予想通りほとんどが拮抗しており「引き分け」

であったり勝敗数が僅差であったり、あきらかな結論を導き出すことはできなかった

⑵　ディベートの記録

3クラス67名分が提出された。

⑶　KHコーダによる分析

提出された記録を書き起こすと内容の重複を含めて「見せる」という意見が348文、「見せない」という意見が329文であった。客観的に読み解くために「見せる」「見せない」に分けてKHコーダに入力しそこから共起ネットワークを作成した。

分析と考察

まず共起ネットワークを見ていく。

○　共起ネットワーク図1「見せる」

グロテスクで悪い場面があることを理解した上で、弱いものを守るために自分が強くなろうとする主人公に着目している。同時にこの作品を見せないことで、幼児が周りの友達と話が合わなくなるのではないかという懸念がうかがえる。また、友情・兄弟愛・家族愛・仲間の大切さなど人間関係について、優しさ・思いやりの心が学べるといった作品自体に表現されている心性の価値を示しつつ、同時に悪影響と思われることに関して親の指導助言が必用であるとの考えを示している。

○　共起ネットワーク図2「見せない」

グロテスクの中身についてを首を切る・血が出る等残虐な場面を示し、幼児が恐怖心を抱いたりトラウマになったりしないかとの懸念が強い。次いでこの作品が人間関係に大きく影響することを念頭に、価値として挙げられる兄弟愛・家族愛に関しても家族が殺されてしまうことと戦いとのつながりを示している。悪影響の中身として悪い言葉遣い・不適切な言葉、過激な戦闘（ごっこ）、女性差別等が挙がっている。

次にディベートの記録の原文を見ていくと4つの論点が挙げられる

①　暴力と流血シーンが幼児に与える影響と解決策についての検討

②　子どもに作品を見せる場合の親（保育者）としての役割

③　幼児に作品を見せなかった場合に起こりうる仲間外れ、いじめなどピアプレッシャーについての検討

④　メディアから幼児に学ばせたい内容とその表現方法について

第1の論点について両者ともにグロテスクで残虐な場面は幼児には悪影響があるとの認識がある。違いとして論じられたのは「昔からグロテスクなものを見て育った大人も普通に成人している。今の時代は考えすぎではないか」という論調があった。それに対して「トラウマにならないまでも何らかの影響がある可能性を考えたらあえて今見せる必要はない」というリスクはあらかじめ回避するという主張がなされた。また、「悪影響があると思うことは言葉遣いでも遊びが少し乱暴になっても親がしっかりその都度注意したり教えたりしていくことが大切」と親の教育力に言及すれば「親の目に留まるところではしない子供はどうする？」「子どものそばにずっとついていることはできない。1度注意して収まれば苦労はしない」と親の教育力に関しての限界について述べられた。これらは第2の論点とも共通する見解である。

第2の論点についてはこの作品が少年ジャンプに連載されていた漫画から作られたものであることに触れ、「言葉が悪かったり真似したかったりするのは当たり前だとわかっていれば問題が起きることは予想できるから対処方法を備えておくのが親」とそもそも幼児向けの題材ではではないことを理解するべきだということが語られると「少年向けの作品なんだったらわざわざ幼児に見せる必要がない。親として見せない決断が大事」と反論している。

第3の見せないことで仲間外れになることや周囲と話が合わなくなることに関しての懸念は幼児に見せると答えた側に強く意識されていた。これは子どもの問題でもあり親同士の間でも起こりうるピアプレッシャーの問題である。「みんな見ているから、見せてほしい」という子ども、「みんな見ているから、見せてあげたら」と言うママ友、それぞれのコミュニティーにおける葛藤を意識している。「子どものためだと思っていたら『うちはうち』とちゃんと教えればいい」という反論がなされた。

第4のメディアから子どもに学ばせたいことについ

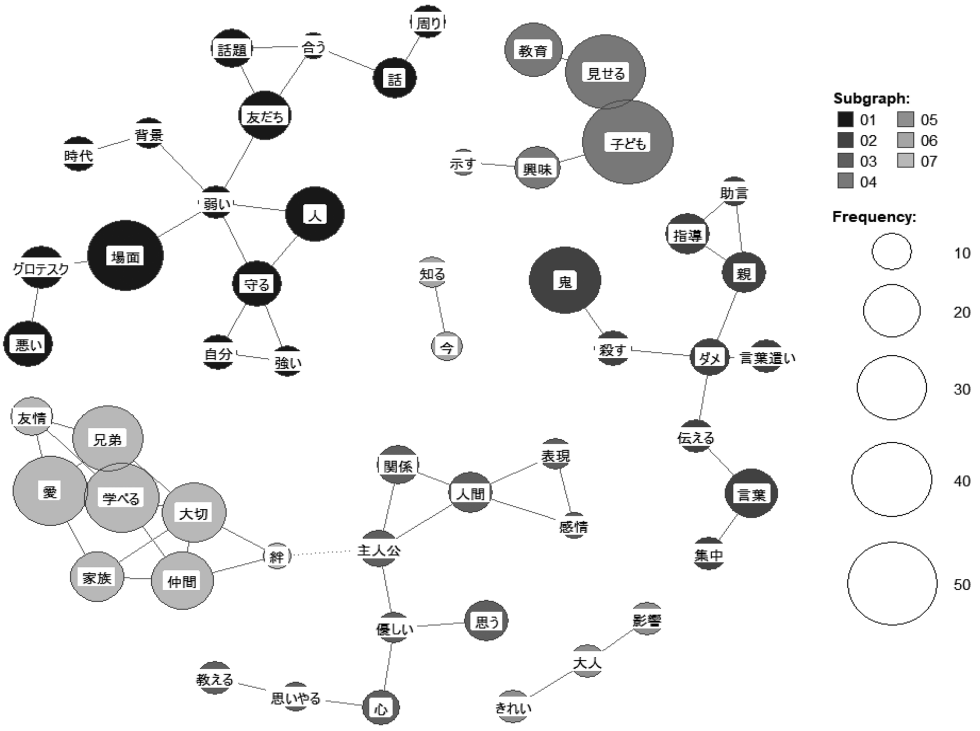

図１見せる

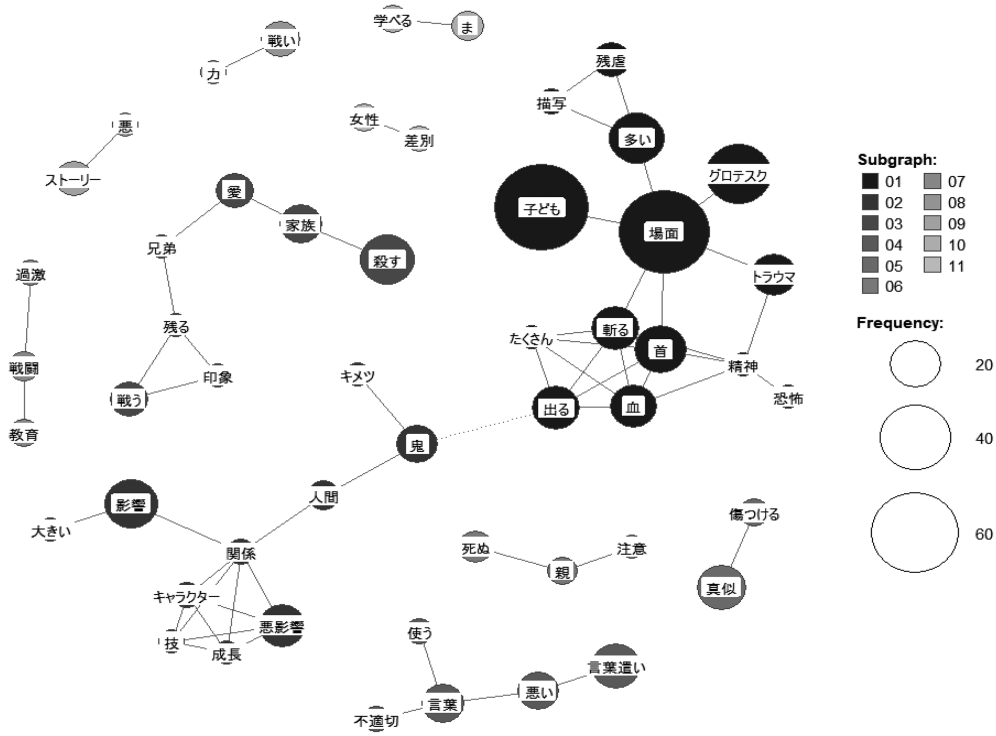

図２見せない

て、家族愛、兄弟愛、仲間の絆、仲間を守る優しさなど、この作品のストーリーに流れる価値については両者ともに異論はないようだ。そこでそれらを伝えるために戦いや流血が必用か「アンパンマン」からでも学べるのではないかという主張がなされた。

実際の討論の一場面では鬼滅の刃の良い点を主張す

ればするほど「それ、アンパンマンで学べるよね」と返され、「血を見なくても学べる」という主張に反論の勢いが弱まったかに見えたころ「そもそも何かを学ばせるために見せるのではない、芸術だし面白い、感動するから見るし、見せるのだ」という意見が出され、論点はメディアの意味や役割について移っていった。

学生がこの問題に真剣に取り組み論議を尽くし描き出した４つの論点は先行研究に矛盾しないと評価できた。

幼児期の暴力番組の視聴は子どもが暴力行為を学習し同様の場面で同様の行動をとるということや成人してからの攻撃行動につながるという指摘はあるが、そこに両親の学歴や父親の職業による社会的地位、両親の攻撃性・移動志向、両親の視聴習慣（暴力視聴をふくむ）が加味されて傾向が強調されるとしたら、親の適切な指導・助言、生活傾向があれば回避される可能性も含んでいるともいえよう。親の教育力の重要性である。また幼児の発達の特性として、物語の内容とは違うところでキャラクターの外見や服装などの表面的なことしか見えておらず内容については深く理解していない可能性もある。このことは流血のシーンを「きれい」と表現したことにつながるかもしれない。「学ぶべき価値」を優先したいと考える者にとっては「まだ早いかもしれない」と考え直すきっかけになるかもしれない。

この作品のブームの最大要因が永田のいうようにコロナ禍でコミュニケーションのハブとして機能して家族関係を円滑にし、生きる楽しみをもたらしてくれたからであり多くの女性の支持を得たこと、母子にとってもコミュニケーションツールとなり、話し合いを重ねながら視聴されているとしたらそこで相応の教育がなされることに期待する。

鬼滅の刃の視聴をめぐってはネット上でも「見せない」という意見を書き込むだけでもどれだけ勇気がいることかと思える昨今、学生たちが正解のない問題に真剣に議論を尽くしたことに敬意を表する。同調するばかりではなく異論を唱えることの重要さも教育者としての大事な素養だと考えるからである。

しかしながら今回の検討は『鬼滅の刃』の「暴力的な側面」に留まり「グロテスクで猟奇的な表現」について掘り下げることができていない。

1997年の神戸児童連続殺傷事件の時に少年Ａが影響を受けたとされる猟奇的な表現のあるテレビ番組が放送できなくなったという例もある。そこには「残虐な行為への嗜好性があるから見ていたのか、見ていたから嗜好性が呼び起こされたのか」という鶏卵問題が残され、だとするとそれらが幼児にどう影響するのかという根本的な危惧は解消できない。

幼児をとりまく医療や心理の専門家による『鬼滅の刃』やこれに続く同様の番組を継続的に視聴した幼児の５年後、10年後、15年後の縦断的研究が行われることを祈るばかりである。

参考文献

五十嵐鮎子，2021，子どもとメディア，脳と発達，53，430-435

高橋登，1991，テレビの子どもへの影響について 発達的な視点からの展望，大阪教育大学紀要，63，575-582

Bandula,A，Ross,D，Ross,S，1968，Transmission of aggression through imitation of aggressive models,
Jaournal of Abnormal and Social psychology，63，575-582

Eron，LD，Huesmann，LR，Lefkowitz，MM，& Walder,1972，27-4，253-263

L. Rowell Huesmann，Jessica Moise-Titus，Cheryl-Lynn Podolski，and Leonard D. Eron,2003，Longitudinal Relations Between Children's Exposure to TV Violence and Their Aggressive and Violent Behavior in Young Adulthood: 1977-1992，Developmental Psychology，39-2,201-221，

足立絵美，2012，テレビキャラクターの実在性の認識について６歳から９歳の子供のインタビュー調査から，心理科学，33-1，16-25

井島由佳，2021，マンガを用いた心理学的アプローチにおける教材開発の検討，社会学研究所紀要，3,1-9

永田夏来，2021，新型コロナウィルスパンデミックと家族ー家庭内コミュニケーションにおける困難と可能性をめぐって，マスコミュニケーション研

究，98, 41-50
株式会社モニタス，2021,「鬼滅の刃」は全ての年代でランキング上位に！全国50万人に聞いてみた！「アニメに関する調査」, https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000014.000008679.html
山下浩一朗，左文字右京（編），2019，実録放送禁止作品　鉄人社